

「地域の論点」

地域と神社と私の論点

熊野出速雄神社 権禰宜
武藤弘樹建築設計事務所 代表
武藤 弘樹

【Ⅰ. はじめに】

長野市松代町の豊栄地区に、皆神山という名前の小さな独立峰があります。その頂上には熊野出速雄神社（クマノイツハヤオジンジャ）という名前の古い神社があり、複数の境内社と合わせて、山の名前に因んで皆神神社と通称されています。

私はそこで神職の子として生まれました。境内の隣で19歳まで育ち、縁あって東京に出てきて建築と都市計画を学び、いまだに東京で右往左往している身ですが、必ず帰るべき故郷はそこにしかありません。そういった人間が愛する故郷に貢献したいと思うのは当然のことですし、そのための手段として建築と神社神道という、やや突飛な組み合わせを用いようとしていることもまた、やはり必然のように思います。

ところで、まちづくりとは、ある程度の専門知識を持ち、地域に利権を持つ当事者が、自己の利益を増加させる長期的な手段として、地域内外の他者と協働する場合に最も効果を発揮する、私はそう信じています。ボランティアでも大学でもコンサルでもなく、愛する故郷のために、そして自分が生きていくために、自分たちでなんとかする、それが本来のまちづくりです。

それを前提として、以下に私が建築家としての職能と神職としての立場を利用して取り組んでいる、神社を核とした地域活性化の試みをご紹介します。

手前味噌でも宣伝行為でもありますが、その姿勢もまた、まちづくりの本質でしょう。

【Ⅱ. 現状と課題①：松代町と豊栄地区】

まずは地域の現状を簡単にご説明します。

長野市の千曲川以南に位置するのが松代町です。かつては基礎自治体でしたが、1966年に長野市に吸収合併されました。真田信之を初代藩主とする松代藩が前身であり、松代城址や旧真田邸等、いまだに地域内には当時の面影が色濃く残っています。

一時的な衰退等、合併政策が裏目に出た事例ではありますが、その後のNPO法人によるまちづくり活動と、近年活躍が目覚ましいIターン・Uターン組のおかげで、活気を取り戻しつつあるように思います。住民の気質は独特であると言われており、閉鎖性や排他性が問題視されることもあります。また、遊学城下町として観光政策に注力していますが、街全体で将来像を共有できていないという問題もあります。

その松代町の南部、上田市との市境に位置する中山間地域が豊栄です。ここもかつて

は豊栄村と呼ばれる自治体でしたが、1955年に松代町に吸収合併され、その後長野市の一部となりました。農業や林業等の第一次産業を生業とする村でしたが、少子高齢化にともなう産業衰退という、典型的な中山間問題を抱えています。また、松代町と豊栄を別個の地域とみる意識があり、地域資源も異なることから、中心市街地との共同体意識はあまり強くないかもしれません。このような状況に置かれている中山間地域は、豊栄地区のほかにも、松代町内に複数存在します。

以上のように、松代町と豊栄には別々の資源があり、個性があり、抱える課題も別のものです。これらを一元的に解決することは困難でしょう。中心市街地の衰退と、中山間地域の衰退とは、別の問題だからです。しかしそれらを個別に対処すべき課題として扱い、更なる乖離を助長してしまうようでは、地域活性化は成し遂げられません。たとえ共同体意識に齟齬があったとしても、社会経済的な共同体として、われわれはすでに相互依存の状態にあるからです。



皆神山と周辺の中山間地域

【Ⅲ. 現状と課題②：皆神神社】

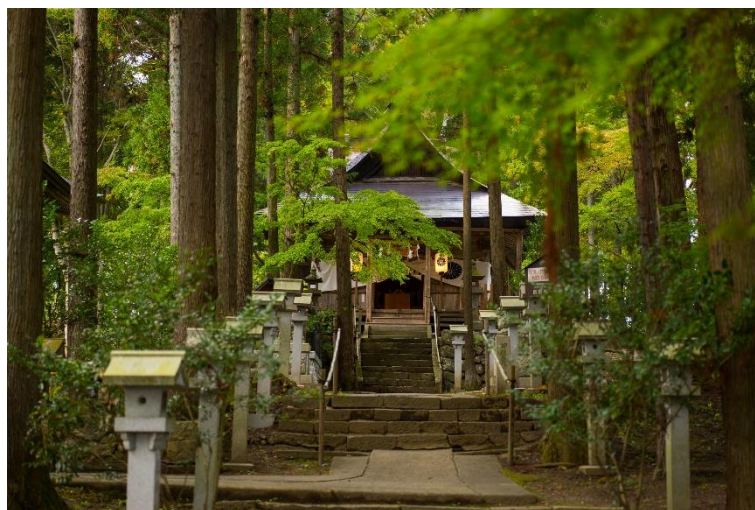
次に皆神神社ですが、御本社である熊野出速雄神社、摂社（主祭神と縁の深い神を祀った社）の侍従神社、そして富士浅間神社、天満宮、弁天社、稲荷社等の末社から成っています。社伝によれば奈良時代養老二年（西暦718年）に奉祀された出速雄神社が起源であり、農耕を司る出速雄命（イツハヤオノミコト）を主祭神として祀っています。

また皆神山は中世以降に修験道で栄え、戸隠神社と並び称されるほどだったそうですが、その皆神山修験道の中心的人物だった侍従天狗坊という修験者を死後祀って建てられたものが摂社の侍従神社であり、火除けと子授け、安産、子育ての神として崇められています。おそらく山岳信仰や自然崇拜からはじまった原始的な信仰が、奈良時代には

神道となり、その後中世に修験道と融合し、明治期には制度的に分離されましたが、実質的にはいまだに未分化なまま保たれている独特な場所であると言えます。

こうした経緯が影響しているのか、皆神山はオカルト的な話題にも事欠かず、近年ではパワースポットとして人気を博し、遠方からの参拝者も増えている状態です。

このように牧歌的な農村のなかで少々浮いた存在の皆神神社ですが、豊栄地区の総鎮守として、古くから地元民に親しまれてきました。加えて地域外にも、篤い信仰を寄せる信者の方々を得てきました。ただし、その特殊な立地から、いつでも気軽に参拝できる神社というわけではなく、運営的な面から言えば、集客や維持管理が困難であるという問題点もあります。



熊野出速雄神社

【IV. 解決策：方針① ネットワーク】

以上のように、地理的・制度的には長野市-松代町-豊栄-皆神神社という包含関係にありながら、人や資本の流れ、および共同体意識は錯綜しており、線的には捉えられないのが現状です。

このような状況に介入すべく私が選んだ手段が、先に述べたように、神社を核とした地域活性化ということになります。とはいえそれが最適解だったからではありません。理詰めのお最適解というものはまちづくりには存在しないというのも、私の考えです。必然に導かれるまま動くこと以上に、大切なことはありません。私の場合は私の出自と環境がそれを必然としたのです。ただし、大きな可能性はありました。片田舎の小さな神社であるとはいえ、特異な地形と歴史背景を備えた神社の跡取りであることは、どれほどの展望をもたらしてくれたでしょう。

この場所を地域の核であり、来街者の最終目的地として捉えた場合、松代町の中心市街地は魅力的な中継拠点となります。交通の面では長野駅からの運行バスが走り、上信

越自動車道のインターチェンジもあります。見応えのある史跡に加えて飲食店、土産物屋、そしてホテルや国民宿舎等の宿泊施設があり、約 250 年の歴史を誇る温泉街としての資源も彩りを添えています。近年ではゲストハウスやイベントスペースも開かれて、若者や外国人観光客を受け入れる体制も整いつつあります。

これらの魅力的な施設群は、地元民が個々の意志と努力で実現してきた成果の集積であり、彼らが愛してやまないのと同時に、全員で将来像を共有していないがために、その価値を客観的には評価しきれていないものでもあります。

しかし将来像を共有するという事は、一つの組織を作って明確な指揮系統のもとに活動することではありません。そのような試みは以前にも松代町で行われ、実際うまくいかなかったという事実があります。もちろん、長野市に吸収合併された後に衰退していった松代町を復興させたのはインフラの整備であり、それは組織的な活動によって成されたものです。しかし資金力に欠ける地方都市の更なる活性化に必要なのは、「もの」ではなく「こと」を軸にした活動でしょう。そして現在の松代町には、まちづくりや地域活性化などという金科玉条には目もくれず、面白そうなことを面白そうな仲間と一緒にやってみる、そういった動機を持つ人々による緩やかなネットワークが育ちつつあります。

そのネットワークに皆神神社を加えること、そして中継拠点としての中心市街地と、象徴的な目的地としての皆神山の連携による相乗効果を狙うことこそが、私の実践すべきまちづくり活動ということになります。

ここで、中山間地域である豊栄地区についても触れておくべきでしょう。

観光客数や定住人口が増えたとしても、豊栄地区が生業としてきた一次産業の衰退を止めることはできないかもしれません。また、地区内に観光施設を整備するような余裕ももちろんありません。ひとつの共同体としての産業的・文化的な独自性を保つことは難しいといえます。しかし、豊かな自然をもつ豊栄地区や他の中山間地域は、松代町内で農的生活を实践する場として価値を持ち続けるはずで、これからの時代、農業専従者が減っていくことはあっても、農的生活が衰えることはないと考えられます。そのときに、豊栄地区の総鎮守として共同体の精神的支柱だった皆神神社が、農的生活を育むための支柱にもなること、そして豊栄地区が農的生活の拠点としての価値を示すことも、大いに考えられるのです。

事実、農耕にまつわる特殊神事である祢古於呂志神事や初穂神事の折には、地元の農業従事者だけでなく、地域外からも参列者が集まり、そこには農的な社交場ともいえるものが形成されつつあります。

【V. 解決策：方針② 核の質】

以上に述べた話は、じつは古くから神社が担ってきた本来的な役割でもあります。

地域共同体の精神的な支柱として、あるいはハレとケの両面において地域の文化経済を支える半公共的な場所というのが、古くからの寺社の役割でした。その伝統を引き継ぐことが、そのまま地域活性化にもつながると考えています。

しかし、古くからあるものが、古いというだけで大きな価値を持つことができると信じられるほど、社会は安定していません。そもそも日本における伝統的なものというのは、各時代に革新を意図して生み出されたものの集積と、その系譜を、総体的に指しているにすぎません。古いものを大切に保存しているだけでは、いつか色褪せていくでしょう。

この場合、地域の核としての神社の、その核の強さと質について再考する必要があります。神が信じられない時代の、精神的支柱とは何か？グローバル資本主義の全盛期における、生業とは何か？そして公共性とは何か？こうした大胆かつ本質的な課題まで視野に収めなければ、神社を扱う手つきは危ういものになるでしょう。

また、まちづくりを行ううえで地域の核、あるいは象徴という概念は不可欠ですが、その核の性質が街の性質を決めてしまうことに注意しなければなりません。核が地域と融合して機能していれば文化経済的に成功と言えるかもしれませんが、逆に地域から遊離して独断専行してしまうようでは、持続可能な地域活性化とはなりませんし、軽薄な印象を拭えません。

ところで神社業界は閉鎖的で保守的な世界です。他と混じることを厭い、古くから守ってきた伝統を変える必要はないと考えられています。

これはある意味では、価値のあることだと言えます。神社が好きだという方は多いですが、なぜでしょう？それは誰にでも開かれた場所でありながら、そこには歴史の重みがあり、洗練された作法があり、不変の雰囲気をもとに、人知を超えたものが介在する余地を残している。近代社会以降の合理的な公共性が失ってしまった、人間の精神性の深さを宿している。こうした魅力は実際、神社業界の閉鎖性と保守性によって保たれてきたものでもあります。

しかし、古代からの伝統を守り、日本人の精神性と切り離せない影響を及ぼしながら、神社という場所はまだ十分に可能性を発揮しているとはいえません。経済的に困窮し、文化的に衰退しつつある現状を変える必要があります。それも、現代社会における地域の核として変わるべきだと考えるのです。

それでは、神社の現代的な価値とはどのようなものなのでしょう？

【VI. 解決策：具体的実践】

この問いに答えるべく、2018年、皆神神社の創建1300年に合わせて記念事業を行いました。これは神社および氏子の方々が御鎮座千三百年祭の記念造営として行った境内の修繕事業を補完する、一連の記念行事という位置づけで企画・開催したものです。

この記念事業の中核は奉納劇の制作・上演であり、皆神神社1300年の歴史を物語としてまとめ、オリジナルの野外劇として奉納することで、下記三つの目的を達成しようとしてきました。

一つ目は、歴史を伝えることです。皆神神社のやや複雑な由緒をわかりやすくまとめて伝えることで、基本的な理解を深めてもらおうという意図でした。また、神道の確立以前から皆神山は信仰の場所であったこと、中世以降修験道が栄え、神仏習合の場所となったこと、さらにその修験者が死後祀られたこと等、多くの神社が本来的に持つであろう多様性と柔軟性を知ってもらうことにも繋がったと思います。

二つ目は、神社や信仰の現代的な意義を問うことです。奉納劇としてのオリジナル現代演劇の製作は、上賀茂神社や鶴岡八幡宮の先例がありますが、歴史を伝えるだけでなく新たな価値を生み出そうという試みは、かなり先進的だったと思います。

神頼みではなく、人が自分を見つめ、祈ること、その精神性そのものを重視し、そのための物理的および精神的な拠り所として神社を位置づける。祈ることの意味を問いながら進む物語は、物語自体の枠を超えて、こうした結論に至りました。これは方針②で述べた、核の質を問うための最初の素描でもありました。

最後に第三の目的は、人的資源の発掘と接続だと言えます。今後の活動のため、地域に潜在する才能や技術を把握し、なおかつこちらにも認識してもらおうという意図がありました。この目的では、奉納劇のほかにも日本酒ラベル、イメージソング等の制作、表具師によるワークショップも行いました。さらに神道と精神医学の接点を探るための瞑想体験教室も開催しました。

とくに神社神道と精神医学や心理学との関係には着目しており、いずれは活動の柱のひとつとしていきたいと考えています。神社の公共性、自然環境、歴史背景等は、東洋的な知恵を重視する一部の精神医学と親和性が高いこともあり、宗教施設であるという厳然たる事実を目を背けることなく、神社の現代的意義を問い直す機会を与えてくれます。



奉納劇の様子

【VII. 終わりに】

以上のように、地域の核としての皆神神社の役割を問い直すこと、さらにその過程で知識と経験を蓄積し、人的ネットワークを構築して影響を受け、与えること。これが現段階で実践中のまちづくり活動ということになります。こうした活動によって、結果としての地域活性化よりもまず、意識と過程の活性化を図ることも重要であると考えています。

また、今後への最大の課題として、一連の活動の事業化が挙げられます。現時点ではこれらの活動は採算性のある事業としては成立しておらず、そのためどれほど立派なコンセプトを掲げたとしても、影響力は小さいままにとどまっています。事業としても成功させることで、より多くの人々を巻き込んでいくことが必要であると考えます。

さて、私にとって切実な地域の論点は、以上になります。

やや不遜な印象を与えてしまったかもしれませんが、矜持は必要です。おらが神社のある、おらが町は世界一。それが私にとっての、まちづくりの本質です。

《参考》

皆神神社ウェブサイト：www.minakami-jinja.jp

武藤弘樹建築設計事務所ウェブサイト：www.hiroki-muto.jp

※本稿についてのデータ及び肩書等は執筆時の2020年2月28日現在のものです。

※表現及び言い回し等は執筆者の原稿を活かした形で掲載しています。